



目次

・郷土史調査レポート だるま窯の調査	2
・心のふるさと無形民俗文化財	3
・収蔵資料の紹介	4
・発掘調査速報	6
・平成12年度事業報告	7
・文化財シリーズ・資料館ニュース	8

だるま窯の調査－瓦窯の測量－

花園町観音山にあった三州瓦を製作・焼成していた瓦窯が第2東名高速道路の建設にともなって失われることから豊田市郷土資料館では2001年2月～3月に瓦窯の測量とかつて使用されていた道具の収集を行いました。この瓦窯は寺田均さんが1960年頃から1994年まで使用していたもので、この間数多くの三州瓦を受注生産というかたちで焼成していました。



だるま窯は近世以後、日本のいぶしかわら 燻瓦を焼成してきた伝統的な小型の瓦窯で、中央に焼成室があってその両側の2箇所から薪などの燃料を炊く構造の窯です。だるま窯は本州各地に分布し、西三河地方に最も多数構築され、長い年月にわたって使用されてきましたが、電気窯やガス窯が普及する中で、ほとんど姿を消し、高浜市にわずかに残存しているほか、現在使用されている窯は全国的にみてもほとんどありません。また、かつて使われていた窯もしだいになくなり、現在残存しているものもわずかです。豊田市内ではこの窯も3月末に取り壊されて、寿町に別のものが1基残っているにすぎません。このような状況から、失われてしまった花園町の瓦窯はひじょうに貴重なだるま窯の1例で、記録が残されないまま失われていく窯が多い中で測量調査ができたことは窯業史上の貴重な記録となりました。また、この窯は構築後に覆い屋が作られたことから他地域の窯のように露天で傷んでいるものが多い中で、残状態がひじょうによく、良好な調査記録をとることができました。ただし、今回の調査は建物の取り壊しなどの日程がせまった中で行ったため、時間的な制

約もあって遺構の地上部分の外形についての平面図及び側面図の作成と写真撮影を実施し、地下部分や内部については十分な記録をとることができませんでした。

これらの記録については現在、図面の細部の集成や写真の整理をおこなっています。また、作業場に残されていた一部の道具類の整理もあわせておこなっています。これらの道具は瓦の焼成時に使用されたものが中心です。

今後は寺田さんの協力を得ながら整理を進めて詳細な報告を作成する予定です。



寿町の瓦窯

(杉浦 裕幸)

夏の風流 — 豊田の盆踊り —

今から300年程前、拳母の各町内には盆踊りの組が組織され、夏の月夜には城下町から神社の境内まで踊りの輪ができるほどに練り廻り、盆踊りは流行を極めていました。

各組は競うほどに、その歌曲は次第にエスカレートし、聞くに堪えない卑猥なものになっていきました。

これに対して拳母藩主本多忠央公は風俗を乱すものとして享保9年に盆踊りの禁止令を出しました。これを悲しんだ拳母の町人、加藤清兵衛は、諸州を遍歴し、ついに志摩国鳥羽港でふさわしい盆踊りを見つけ、その歌曲の収集と踊りの奥義の伝授され、早速、拳母の町へ帰ってきました。

清兵衛の熱心さに心を動かされた忠央公は、禁止令を解き、拳母の町は以前にも増して盆踊りが盛んになりました。さらに拳母のみならず三河一円にまで広がり、祭りに盆踊りを踊らないところはなかったといわれています。

この功績を称え、人々は彼を盆清と呼ぶようになりました。

しかし、盆清が苦労して集めた歌曲もいつのまにか忘れ去られ、いまに受け継がれている形跡は見当たりません。

いつの頃からか盆踊りの曲は、三味線や太鼓が加わる賑やかな民謡へと移っていきます。流行曲として郡上節や木曾節などが各地で踊られました。土橋の法雲寺和尚、水谷大成は三味線からアコーディオンまでひくハイカラな和尚として有名でしたが、盆踊りにも熱心で、後に早川流やぐら太鼓を創流する早川満男に盆太鼓の手ほどきをしたのも彼でした。



昭和25年頃の盆踊り（提供 鷲村正光氏）

豊田の盆踊り曲の中で古いものに、「拳母小唄」があります。これは昭和6年に拳母町芸妓組合「香桜連（かおうれん）」の依頼を受け、野口雨情が作詞し、作曲藤井清水、振付島田豊により作られました。

お座敷の舞踊として作られた「拳母小唄」ですが、当時を偲ばせるおしゃれな歌詞と軽妙な振付は今も好評で、豊田の民謡・盆踊りとして生き続けています。

やがて高度経済成長期以降、盆踊りは大きく様変わりしました。レコードやカセットテープの登場により、やぐらの上からは唄い手と三味線が消え、太鼓だけが音頭取りとして残りました。

当時、豊田市は社会的人口の増加が激しく、随所に住宅地の開発が行われました。地域のふれあい活動のひとつとして、盆踊りが盛んに行われるようになり、盆清以来の大流行となりました。

運営の主体が青年団・婦人会から自治会・コミュニティ会議に移り、盆踊りは青年たちのレクリエーションから地域のコミュニケーションの重要な行事として位置付けられました。



青年センター盆踊り、西山元市長と早川満男氏（提供 早川満男氏）

盆踊りの曲についても流行歌の影響が大きく、民謡・音頭だけでなく、歌謡曲や演歌、ロックなど多彩なジャンルの曲と踊りが登場するようになりました。こうしたなかで、平成元年、豊田においてんが誕生しました。念仏踊りを起源とする盆踊り(風流)は、時代の流行を敏感に吸収し、したたかに生きてきました。

盆清からおよそ300年、今年も拳母の夏の夜は、熱狂的な踊りの連が練り廻ります。

（豊田地域郷土芸能研究会）

収蔵資料の紹介

(1) 被布 (2) 風呂敷

本誌33号に続き、館蔵の木綿資料を市内在住の木綿研究家佐貫 尹氏に調査していただきました。

資料(1) 被布の外観

被布を『広辞苑』から要約すると、表衣の上にはおる外出用の服の一つで、江戸末期から茶人や俳人などが着用し、後に婦人や小児も外出時に着物の上に着たとあります。また、『染織辞典』によれば、地質は木綿のほか絹織物や毛織物もあったとのこと。



被布(写真1)

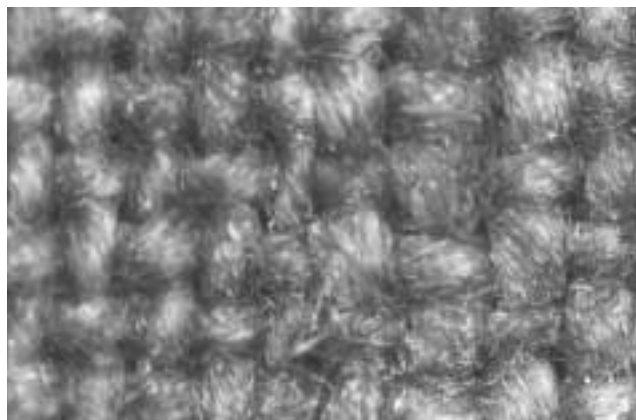
収蔵被布(写真1)は木綿製・男性用です。色は浅葱(やや淡い紺色)の無地で、肩の部分にかなり退色があるため愛用されていたと思われます。襟と組紐の飾りの部分は黒色のラシヤ(毛織物)ですが、後補かも知れません。組紐は襟に近い3か所と、裾近くに左右の合わせ部分の向かって左側にあり、着付けの姿を整えるとともに装飾を兼ね、浅葱の無地に黒のアクセントを配したシンプルなデザインです。

裏地は肩と袖の部分にそれぞれ絹がついており、着丈が短い関係で肩裏は文字通りの肩の部分に留まり、背から下の胴回りの部分を木綿生地が二重になるように仕立てられていて、たいへん実的な感じです。付属品を含めた総重量は670gです。

この被布に使われている布地の総尺は大略10.18mですが布幅が36.5cmぐらいあり、当時の普通の幅よりやや広く9寸6分と思われます。10.18mという長さは羽尺(羽織尺)1反2丈7尺内外に相当することから、この被布は幅9寸6分・長さ2丈7尺の木綿羽尺1反を使って仕立てられたといえます。

素材の観察

この被布の素材は木綿で、糸は手で紡いだ糸です。実は初めてこの被布に直面した瞬間、思わず息を



被布生地拡大図(×20)(写真2)

(撮影 愛知県三河繊維技術センター)

呑んでしまいました。それは後述のように『広益国産考』の教えをそのまま具現した見事な手紡ぎ木綿であったからです。木綿の糸は短い綿の繊維を束にしてそれを少しずつ引き伸ばして細くしながら撚りをかけて作ります。この時、撚りのかけ方によって写真2のように繊維が左上から右下に流れるように並ぶのが手紡ぎ糸で、この撚りをS撚りと呼びます(写真2)。

これはつむぐ道具の仕組みと使い方のルールによってS撚りとなるのです。これに対して機械で紡いだ糸は機械の構造と作業のしやすさから、繊維は右上から左下に並ぶように撚りがかかります。国内では江戸時代から明治初期までは皆手紡ぎでしたので、撚りのかけ方(S撚り)と糸の太さから国内で作られた手紡ぎ糸は見分けることができます。この被布の生地に使われている糸は国産の手紡ぎ糸です。当時の木綿の織り方は平織でした。平織は写真2のようにどの経糸も緯糸も必ず交互に上になり下になって織り合わされる織り方です。

この被布の素材の手紡ぎ糸は写真2のように手紡ぎ糸としては驚くほど太さにむらが少なく、そのうえ織り目は緻密で、経糸も緯糸も2本を単位として正方形に織られているのです。つまり1cmの間に経糸と緯糸が同じ本数ずつ並んで平織に織り合わされているということです。ルーペで確かめてみると経糸は1cmの間に19本~20本で平均19.6本、緯糸は18本~21本で平均19本です。このため経糸と緯糸の織りのバランスが良く、そのうえ織りのバランスと糸の太さがマッチして緻密な地合いを築き上げているのです。『広益国産考』の教えとはこのことなのです。手紡ぎ糸をこのように緻密に正方形にバランスよく織り合わせることは大変な

技術が必要で、普通は緯糸が疎くなってしまうので縦に長い長方形に織り合わされてしまうのです。

江戸末期の当地方の木綿は織り合わせのバランスのよさと糸の太さがマッチした優秀な木綿が多く、また主流となる経糸密度は、経糸は1cmの間に19本から23本という木綿が当地方では主力商品（本誌33号 表1参照）であったことを考え合わせると、この被布に使われている木綿は当地方の生産品の可能性が高いと思われます。

資料（2）風呂敷の観察

この資料は縦151cm×横144cmという大きな風呂敷です。これも素材は手紡ぎ糸の木綿で紺色の無地、写真



風呂敷（写真3）

3のように四隅にさしが施されています。この風呂敷は日常たびたび使われたようで、破損の大小19カ所を丹念に補修していることから、旧蔵者の心情が伝わってきます。

風呂敷の中央部分には直径80cmぐらいの円形の布の緩みがみられることから、大きくてかなり重い品物の持ち運びに使われていたようです。

さて、被布同様この資料も手紡ぎ糸が使われていますが（写真4）、それぞれの経糸と緯糸が前の写真2のように整然と並んではいません。その理由を考えてみると、①繰り返し手揉み洗いがなされているであろうこと ②風呂敷として品物を包むと布は斜めに強く引っ張られること ③糸が被布の糸より、やや撚りが多くかけられているのではないかと推察されます。しかしこのように経糸と緯糸がやや曲がっていても経糸と緯糸の2本を単位としてほぼ正方形を形づくっていることは、前の被布と同様に1cmの間の経糸と緯糸がほぼ同じ本数並んで平織に織られているためです。ちなみにルーペで数えてみると経糸は平均18本、緯糸は17本です。ここで再び江戸末期の当地方の綿糸相当番手をみると15～19（'S）が主流で（本誌33号 表1）この風呂敷には当地方の木綿としては主流とな



風呂敷生地拡大図（×20）（写真4）
（撮影 愛知県三河繊維技術センター）

る木綿よりやや太い糸が使われていることがわかります。そのような気持ちで写真2と写真4を見くらべると、後者の糸のほうがやや太く見えます。前者は衣料用の中でも外出用・旅行用のはおりで堅牢さが求められるため、主流となる木綿の中では最も太い糸を緻密に織り合わせ、後者は風呂敷という雑用布のため被布の糸よりさらに太い糸が使われています。しかし限度以上に糸が太いと布は厚くなり過ぎて包みの結びがしにくくなったり、風呂敷自体の目方が重くなり過ぎたりして実用的ではありません。大きくて重い品物を包むにはこれぐらいの太さの糸で緻密にしかも織り合わせのバランスの良い木綿を使うことがよいと経験的にわかっていたのでしょう。

ところでこの風呂敷に使われている木綿は布幅約31cm、長さは約7.75mです。普通の木綿の布幅は約36cmで31cm幅という反物は市販にはありません。このことからこの風呂敷の素材は旧蔵者が自家の残り糸の活用のために大型の風呂敷用に31cm幅の織物を計画的に織ったものであろうと推察いたします。江戸から明治期の当地方はほとんどの民家で機織りが行われていました。

2つの資料を観察して

少なくとも120年の時を経た2つの資料は幸いに旧蔵者の扱いとその後の保管がたいへん良いので、使用のための自然な変形と変色以外の破損は見られず、ほぼ完全な資料で大変貴重です。

本誌33号の縞本帳では当地の生産にかかる三河木綿の素晴らしさを強調しましたが、これら2つの資料の観察によって縞本帳の内容を更に裏付けすることができました。

今後もこれら貴重な資料の保存はもとより、これらを作りあげた先人の技術を伝承することの大切さに意を留められますよう願ってやみません。

（木綿伝承工房きぬた 佐貫 尹・佐貫美奈子）

発掘調査速報

○万加田遺跡（荒井町万加田）

11月から調査が始まった万加田遺跡は、2月までに奈良時代の竪穴住居7軒と掘立柱建物1軒、甕や甑などの土師器が出土した竪穴状遺構、溝が確認されました。また縄文時代の土坑も検出されました。出土遺物は主に須恵器や土師器などですが、極少量ながら墨書土器、ヘラ書き土器、硯の一部、緑釉の陶器などが出土しています。

2月以降の調査で地面を約10～30cm掘り下げたところ、縄文時代の竪穴住居3軒、配石遺構1基、野外炉1基、廃棄土坑2基などが検出されました。竪穴住居の中からは黒曜石の破片が多く出土しており、また配石遺構と廃棄土坑からは多くの縄文土器が出土しています。竪穴住居の時期は、遺物から縄文時代の中期後葉（4000～4500年前）と考えられ、万加田遺跡の東約200mに位置する船塚遺跡とほぼ同時期の遺跡であることがわかりました。船塚遺跡との間には低湿地か川などがあったと考えられるので、同じ遺跡とは言えませんが、

位置といい時期といい密接な関係があったと考えられます。また万加田遺跡は、まだ南西方向に広がっていく可能性があります。

縄文時代の遺構面の下には礫層や川原石が確認されており、それ以前には川があったこともわかりました。



縄文土器出土状態

○古城遺跡（御立町2・11）

D区の調査が終わりました。主な遺構として奈良時代の土坑や鎌倉～室町時代の掘立柱建物跡、土坑、土坑墓、溝跡、井戸跡などが検出されました。出土遺物は山茶碗や土師皿などの土器類の他に、管玉や紡錘車、漆器碗、溝跡から永楽通宝や元豊通宝といった古銭が紐にくくられた状態で約75枚出土しました。

今回検出した井戸跡を合わせると、古城遺跡では4基の井戸が見つかったことになります。いずれも鎌倉～室町時代のもので、2基は素掘りの井戸、1基は縦板組井戸、1基は石組の井戸でした。このうち、A区SE1は直径約2.2mの円形のプランで、深さは約3.5mありました。遺構面から約90cm掘り下げたところ、一辺約90cmの正方形の縦板組井戸枠が検出されました。一辺に4枚の縦板を並べていました。井戸枠内からは土器や桃などの種、木片などが多数出土しています。特に井戸を最終的に埋める際に、完形の土器をまとめて埋めるなど祭祀を行った様子がうかがえます。

した。また、縦板組井戸枠の下にさらに3段のタガをもつ桶枠が検出されました。桶内からは完形に近い漆器碗が2個体、重なって出土しています。底面には浄化作用を兼ね、小石～拳大の石を敷き詰めていました。

すべての調査を終了し、古城遺跡は大きく奈良～平安時代と鎌倉～室町時代の2時期の集落が営まれていたことが判明しました。特に鎌倉～室町時代には集落を区画する溝の中に居住域と墓域が形成されていたことがわかりました。



井戸枠出土状態

平成12年度 郷土資料館事業報告



登録有形文化財に登録された豊田市青少年相談所

平成12年度の豊田市郷土資料館・文化財保護課の
行いました事業を報告します。

1 文化財指定

シデコブシ群生地（琴平町）指定諮問

2 文化財登録

豊田市青少年相談所（旧愛知県蚕業取締所第四
支所挙母出張所） 同門（喜多町） 旧井上家

西洋館（民芸館内）以上3棟

平成12年10月18日文化庁原簿登録

3 展示

入館者総数 7,893人

特別展「豊田市の城下町展」13年2月16日～3月
18日 3,005人。 記念講演 新行紀一先生、
展示図録の刊行

企画展「古絵図展」12年6月2日～7月30日

挙母藩関係古絵図面 879人

「食の民俗」12年10月13日～12月24日

弁当箱、ハレの食器 1,196人

棒の手会館「猿投山の自然と風物展」12年10月
21日～13年2月28日

4 補助事業

挙母祭本町町蔵改築工事補助

中町山車修理、平井町山車大幕取替え・楽器修
理補助

棒の手、山車、囃子維持保存事業補助

人物顕彰事業補助・6団体

5 資料収集

猿投神社文書複製、松平乗友筆墨画「夏之富士」、
鈴木正三著『反故集』、殿貝津村文書

6 埋蔵文化財

古城遺跡、花本遺跡、万加田遺跡発掘調査

滝1号墳移築予定地の造成

岩長遺跡、神明遺跡、新金山遺跡、神明社古墳
の出土品整理、報告書の刊行

7 県史編さん支援

中近世文書・猿投神社、近世文書・岩倉町宇野
家、越戸区有、寺部区有、花園町寺田家文書、
近代文書・鷺鴨町区有文書調査

その他

12年9月12日には、東海豪雨の影響で本市にお
きましても多くの災害が発生しました。 百々貯
木場跡にも矢作川の濁水が満水となり、多量の泥
土が流入し、北側の岩本川の法面が崩落するなど
被災しました。

百々貯木場跡浚渫工事

旧図書館文化財倉庫外壁補修工事

博物館実習生受入 7月（7日間）18名

城址は足助街道と新城街道（国道301号線）の交差点で、巴川舟運の発着点でもあった九久平の街の東方にあります。険しい山上にあり、主郭部は標高204mで、裾部との比高は120mほどあります。

ここは、土地の土豪である長坂氏の館でしたが、応仁、文明（1469～86）の頃、松平宗家3代の信光によって攻略され、一族の手中に収められたとされています。岩津に進出した信光にとっては松平郷との交通路確保のためには戦略的な要地でした。

15世紀末になって、松平宗家4代目親忠の次男である乗元に与えられ、初代の城主になっています。

4代城主親乗は大給城を拠点として周辺に勢力を拡大し、三河平野での織田、今川氏の対立下において、織田氏をめぐり宗家、一族とは立場を異にして



文化財シリーズ

36

大給城址
（国指定文化財）

いました。天文年間には松平郷松平氏を夜襲し、さらに弘治2年（1556）滝脇松平氏を襲撃するなど、周辺一帯をめぐる合戦が展開されました。

5代真乗に至り家康の配下に帰し、武田氏の三河侵攻に備えて武節城に移っています。天正3年には、滝脇松平氏の襲撃に

より城は放棄されています。その後、6代家乗が家康の関東移封に伴い上野国（群馬県）に移ったことから、大給城は廃城となりました。

現在見られる遺構は、2代乗正の代、永正7年（1510）の大改修の折にできたものとされています。城郭の規模は東

西220m、南北280mで大規模な山城となっています。城址に立つと、西側が大きく開かれており、眺望が良いことから、ここを訪れる市民も大勢みえます。

資料館NEWS

○平成13年度特別展・企画展のお知らせ

・特別展（豊田市郷土資料館）

『宇都宮三郎展（仮称）』

期間：平成12年11月3日（土）～12月2日（日）

内容：幕末から明治時代にかけて活躍し、日本の化学工業が発展する礎を築いた宇都宮三郎翁の事績を紹介します。福沢諭吉の親友であり、化学者・発明家など様々な顔を持つ宇都宮三郎翁の人物像について、「近代」という時代背景から探る予定です。

・企画展（豊田市郷土資料館）

①『とよた発掘ファイル2001』

期間：平成13年5月18日（金）～9月2日（日）

内容：昨年度の発掘調査によって、豊田市内の遺跡から新たに出土した遺物をいち早く展示公開し、調査

の成果を紹介します。

②『郷土の俳人展』

期間：平成14年2月1日（金）～4月14日（日）

内容：短冊・俳画などの作品を中心に、郷土ゆかりの俳人達について紹介します。

・企画展（棒の手会館）

『絵馬展』

期間：平成13年4月29日（金）～9月24日（祭日）

内容：色々な絵馬を展示します。

.....

郷土資料館では、特別展と企画展に関連した資料を探しています。宇都宮三郎翁や、近世・近代の郷土の俳人について、情報をお寄せください。

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）年末年始

入場料 無料（ただし特別展開催中は有料となります）

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.36■

平成13年6月10日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎（0565）32-6561 FAX（0565）34-0095

E-mail：rekihaku@city.toyota.aichi.jp